

シュタイナーの人間観・世界観と道德教育

—「メルヘン」のホリスティックな解釈を通して—

下田好行*

シュタイナーの道德教育論は「感謝、愛情、義務の徳」「道德的想像力」「倫理個体主義」に代表される。シュタイナー学校の道德的側面の授業実践では、詩の朗誦、語り聞かせ、劇の上演、寓話と聖人伝説、聖書、オイリュトミーなどがあげられる。この中で、「メルヘンの語り聞かせ」はシュタイナー教育の特徴で、シュタイナー幼稚園の頃から行われる実践である。主にグリム童話（メルヘン）を扱い、教師は淡々と語り聞かせを行う。絵本の読み聞かせをすると制作者の意図が直接子どもの内面に伝わる。ゆえに、道德的想像力を重視するシュタイナー学校では、語り聞かせが採用されているのである。メルヘンに関しては、ユング派は「普遍的無意識の元型」がメルヘンに投影されていると考える。シュタイナー派は「宇宙の古い靈的な神秘の表現」が投影されていると考える。シュタイナーはもともと人智学協会を主宰する宗教家であり、人間は物質ではなく靈的な存在と捉えている。人間は「体」「魂（心性）」「靈（精神）」で構成されており、自己の魂が進化・発展していくことが人間の生きる目的であるとしている。シュタイナーは、メルヘンにはこの現実社会から超感覚的世界へと魂が進化していく過程がよく表現されていると言う。これはゲーテの書いた「緑の蛇と百合姫のメルヘン」の中でも確認できた。ここにシュタイナーのメルヘンに関するホリスティックな解釈が表れている。

キーワード：シュタイナー メルヘン ホリスティック ゲーテ 道德教育

1 はじめに

シュタイナー教育では、子どもに「メルヘン (Märchen)」を語り聞かせる。シュタイナーの「メルヘン」研究に関しては、菊池誠子の研究がある。¹ この研究は、シュタイナー幼稚園において、「メルヘン」の語り聞かせがどのように行われているか。また、どのような心構えで教師は「メルヘン」を語ったらよいかに論及したものであった。しかし、そこでは、シュタイナー教育の根幹である人智学の視点からの解釈が行われていない。また、メルヘンのテキストにおいても人智学視点からの解釈が行われていない。そこで、この研究では「メルヘン」のどのような視点が子どもに道德性を与えるのか。メルヘンのテキストにはどのような教育的構造があるのか。このことをシュタイナーの思想的な背景である人智学の視点から追究することを目的とする。メルヘンの実際

の解釈においては、シュタイナーが私淑するゲーテの書いた「緑の蛇と百合姫のメルヘン」をテキストとして解釈していく。メルヘンの解釈に関しては、メルヘンを論理的思考で解釈するのか、直観的認識から解釈するのか、問題となるところである。今度の学習指導要領の改訂では、「特別な教科道德」が誕生する。そこでは「考え、議論する道德」が叫ばれている。道德は論理的思考で育まれるのか。それとも直観的認識で育まれるのか。この問題を取り扱うことは、現在の道德教育を考えるうえでも重要なことである。

2 道德的側面からみたシュタイナーの人間形成論

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1801-1925) は人智学協会 (Anthroposophische Gesellschaft) を主宰する宗教家である。ゲーテ研究の後、神智学協会に入会し、ドイツ支部の責

*しもだ よしゆき 東洋大学文学部教育学科

任者を務めたが、考え方の違いから脱退した。そして、自ら人智学協会を立ち上げた。彼は芸術・医学・農業・建築・キリスト者共同体等、多方面に活躍したが、とりわけ教育の分野では、シュタイナー教育として、大きな流れを作った。シュタイナー教育では、今、注目されている「道徳」の問題に関して、どのような考え方を有していたのだろうか。筆者はシュタイナーの道徳教育の特徴を次のようにまとめた。²

(1) 道徳的側面からみたシュタイナーの人間形成論

1) 「感謝、愛情、義務」の徳

まず、シュタイナーの道徳教育は「道徳の時間」を設けず、エポック授業や専科の学習、学校の教育活動全体を通して道徳性を育むものである。人間のあるべき姿を価値や知識として注入するのではなく、人間の内面の中で、何が育っているのかを重要視する。しかも、その内面は人間の発達程度によって違ってくる。したがって、道徳的な内面性も人間の発達段階によって、育む重点が違ってくる。シュタイナーは7年を周期とした発達段階を考えている。道徳性に関しては、幼児期は「感謝」、児童期には「愛情」、思春期以降は「義務」を育むことが期待される。コミュニティーに対する「責任性」の根底には、近隣の人、つまり、他者に対する「愛情」が必要である。そして、他者を愛するためには、まず、自分自身を肯定的に捉え、自尊感情を持つ必要がある。この感情を持ってこそ、他者を愛する気持ちが出てくる。こうした自己肯定感は「感謝」によって出てくる。「感謝」によって、自己にふりかかってくる現実を肯定的に受け止めることができるのである。シュタイナーは、この「感謝、愛情、義務」を人間の基本的な徳とした。こうして人間は「自律」した存在となるのである。これがシュタイナー教育のコンセプトである。シュタイナーは、人間が「自律」を手に入れることによって、はじめて人間は「自由」を獲得できるとした。そこには自己の欲望や感情に振り回されない、自分を完全にコントロールできる「自由」な人間が存在する。

2) 道徳的想像力

シュタイナーは「道徳的想像力」を想定している。自己の理念を具体化するためには「道徳的想像力」が必要としている。ただ、規則を述べるだけでなく、それを人間の表象にまで高められてこ

そ、人間の道徳性は動き出すのである。シュタイナーはこの表象にまで高める想像力を「道徳的想像力」と呼んだ。この「道徳的想像力」は人間に自由を与えるものである。行動の基準が外から与えられるものであるならば、人間には自由がない。そこには自己決定権がないからである。人間は自ら決定し、自己の想像力によって、人間の内側から作り出した基準こそ、道徳性であるとしている。自分が正しいと思うことを自己の内側から表象し、自己決定したものこそ道徳的なものなのである。このことをシュタイナーは「対象への愛、行為への愛があるときに道徳的想像力は働く。」とも表現している。足が自然と一歩前が出る、いわゆる「意志」状態の時、人間はまさに自由なのである。

3) 倫理個体主義

「道徳的想像力」によれば、倫理、道徳性は自己が自ら創り出すものである。ところが、人間の直観はさまざまである。それに伴って生まれる概念や想像力、表象もさまざまである。ゆえに人間の倫理、道徳性はさまざまであり、個別的なものであるとすることができる。そうした意味で、シュタイナーは倫理・道徳性に関して「倫理的個体主義」を唱えている。普遍的な道徳を想定するのではなく、倫理・道徳性は人それぞれによって違ってくと主張している。この考え方でいくとすべての人に共通な普遍的で一般的な徳目は存在しないことになる。また、たとえ存在したとしても、徳目を一つ取り上げ、多くの子どもに教えても、子どもの側では教師のねらい通りには理解しない。子どもの側では、それぞれ自分が内面で直感し表象した部分だけしか理解しえないことになる。倫理・道徳性はあくまでも個々の子どもが自己の内面で創り出すものなのである。

(2) 道徳的側面から見たシュタイナー学校の実践

シュタイナー学校で道徳教育に直結する活動と云えば、詩の朗読、語り聞かせ、劇の上演、寓話と聖人伝説、聖書のエポック授業、オイリュトミー等があげられる。この中で、童話(メルヘン)の語り聞かせや寓話・偉人伝・聖書のエポック授業は、シュタイナー教育の特徴的なものと言える。例えば、国際ヴァルドルフ連盟が出版した『自由への教育』では、「童話」は小学校1年生に位置付けられていた。ここでは「ホレ婆さん」「トロ

ルの結婚式」を紹介し、邪悪な妖精、妖怪、巨人、魔女といった悪の権力者が人間と同じような姿で現れる。登場人物はその本当の姿をいつしか見破り、悪から離れ、善へと向かっていくモチーフに触れている。この文献では1年生に童話を授業する意義として、「童話は、子供たちの心に、正義と不正義についての感情を養ってくれます。」と記されている。³

また、小学校2年生では、「寓話と聖人伝説」が扱われる。「巨人オルフェウス」が強い主人に仕えたくて修行を繰り返す。川で光り輝く子どもを背にのせ、その子どもがキリストであった物語である。ここでは、「寓話には人間の弱さが動物の姿をとって表れています。」とし、こうした寓話ばかり話していると、子どもの内面は嘲笑に満たされてしまう。そこで、子どもたちの内面を高揚させ、自己の内面の粗暴さを統制した「聖人伝説」の物語が必要になってくると述べられている。さらに、小学校3年生では、「旧約聖書」が扱われている。「バベルの塔」「モーゼの出エジプト」に触れている。⁴

一方、日本のシュタイナー学校の実践では、学校法人「シュタイナー学園」が小学校2年生の「国語・動物寓話と聖人伝」の実践を報告している。実践者は後藤春日、2011年6月から4週間、「動物寓話」のエポック授業を行った。また、10月から4週間、「聖人伝」のエポック授業を行った。⁵

春日は「動物寓話」では、「うそつきの羊飼（イソップ）、キツネとブドウ（イソップ）、肉を加えた犬（イソップ）、キツネとツル（イソップ）、王様選ばれたキツネ（イソップ）、金の卵を産むメンドリ（イソップ）、ツルとアオサギ（ロシア民話）」であった。授業展開は、それぞれの寓話で、「①物語を聴く。②再話する。Retell。③物語の絵を描く。④物語を要約した文章を書き写す。⑤要約した物語を音読する。⑥要約した文章を覚えて朗唱する。」であった。このエポック授業の後、1学期の終わりの月例祭の時に、春日は動物寓話の朗唱と寸劇も行った。

一方、聖人伝のエポック授業では、「ゲオルグ、クリストフォロス、マルティン、エリザベート、ニコラウス、フランチェスコ、マザー・テレサ、良寛」が扱われていた。授業の展開としては、「①物語を聴く。②再和するRetell。③物語の絵を描く。④物語を要約した文章を書き写す。⑤要約し

た物語を音読する。⑥要約した文章を覚えて朗唱する。」であった。要約した文章は七五調で書き、このリズムのよって子どもに文章を覚えさせ、朗唱をさせた。春日は「七五調のリズムによって、聖人の生き方を要約しエッセンスを伝える言葉が子どもの体の中に入っている」と述べている。⁶

春日はこの動物寓話と聖人伝の実践によって、子どもの内面に「動物的な面とそれを克服しより高きもののために変容させていくことのできる人間の聖なる面を、しっかりと体験し、調和させていくことが大切である。」と述べている。⁷

昔話（メルヘン）の教育実践は、シュタイナー幼稚園では特に重要な教育実践となる。シュタイナー幼稚園では主にグリム童話などの語り聞かせを行っている。シュタイナー教育では、読み聞かせではなく語り聞かせを重視する。それは絵本の読み聞かせだと絵本作者や語り部の制作意図が子どもの内面に直接的に入ってしまうからである。子どもがお話という言葉を知り、それを自己の表象を使って、概念を創造的に作りあげることがシュタイナー教育では重視されている。シュタイナーの「道徳的想像力」である。

3 シュタイナーの「メルヘン」論

(1) ユングのメルヘン論

ここでは童話（メルヘン）の教育的意味について追究する。童話における精神科学的な解釈に関してはユング派の研究とシュタイナー派の研究がある。C.G.ユング（Carl Gustav Jung、1875～1961）は、心を意識と無意識を分け、童話や神話の中に人類の共通した普遍的無意識（collective unconscious）があると主張をした。ユングは人間の無意識層の奥に民族や人類に共通した原像があるとした。この原像は個人の体験によるものではなく、人類の長年の経験の蓄積によるもので、これを「元型（Arche-typ）」と名づけた。「元型」には、「影」「アニマ」「アニムス」「太母」「老賢者」「ペルソナ」「永遠の少年と永遠の少女」「トリックスター」などがある。この神話的元型が存在する無意識層が普遍的無意識である。ユング派の研究者である河合隼雄は昔話の発生源を「ある個人が何らかの元型的な体験をしたとき、その経験をできるかぎり直接的に伝えようとしてできた話が昔話の始まりであると思われる。」と述べている。⁸

そして、神話と伝説と昔話の違いを次のように説明している。⁹

伝説は昔話と比較すると、元型的な体験が特定の人物や場所と結びつけて語られるものである。(中略)昔話は特定の場所と時間からの思い切った分離があり、それは内的現実への接近を容易にする。(中略)神話の場合は、その素材が元型的なものであることには変わらないが、それは一民族、一国家のアイデンティティの確立に関係するものとして、より意識的、文化的な彫琢が加えられている。

河合は、人間の内面に接近するものとして「昔話」を重視している。そして、昔話を「人間の内的な成熟過程のある段階を描き出したもの」¹⁰として位置づけている。

(2) シュタイナーのメルヘン論

ユングは童話(メルヘン)には人間の成熟過程の一面を投影しているとした。ユングと同じく精神科学を探求したシュタイナーは、メルヘンに対してどのような考えを持っていたのだろうか。シュタイナーがメルヘンに関して述べている講演、論文は4本存在する。「霊学の光のもとにみた童話(メルヘン)」「童話(メルヘン)の解釈」という講演と「童話(メルヘン)における薔薇十字会の叡智」「緑の蛇と百合姫」にみられるゲーテの精神様式」である。¹¹

まず、シュタイナーはメルヘンをどのように捉えているのかを明らかにしなければならない。シュタイナーはメルヘンを次のように説明している。¹²

今日の人々が自分のファンタジーから童話を作り出せると信じているとすれば、それは通俗的なものの見方です。宇宙の古い霊的な神秘的表現である昔のメルヘンは、そのメルヘンをつくった人々が、霊的神秘を物語ることのできる人たちのもとで耳を澄まし、傾聴することによって生じました。ですから、その組み合わせや構成は、霊的神秘に即したものです。私たちは次のように言うことができます。メルヘンの中には、全人類の小宇宙そして大宇宙の霊が生きていると。

シュタイナーは、メルヘンは創作ではなく、「宇宙の古い霊的な神秘的表現」であるという言い方をしている。シュタイナーの場合はユングの「普遍的無意識の元型の表現」という言い方よりもさらに一步踏み込んでいる。また、次のような説明もしている。¹³

メルヘンというものは本来アストラル的に生じた事象の再現であり、それがさらに語り継がれたものである、ということを私たちははっきりと念頭に置かなければなりません。

このアストラル的に生じた事象とは何か。問題となるところである。このことに関しては後で追究していく。次に、メルヘンの持つ教育的意味について考えてみる。シュタイナーは次のように述べている。¹⁴

メルヘンのイメージの中に、子どもは自分の魂のためにすばらしい養分を感じとります。そのイメージの中で、子どもは存在と根源的に結びつきます。人間は、合理的で知的なものに自分を委ねているときでさえ、決して存在の根源から引き離されることはありません。どんなに生活に没頭しなくてはならなくても、存在の根源と密接に結びついています。

メルヘンは「魂の養分」として、人間に必要なもの、とりわけ子どもにとっては必要だということである。それはメルヘンが「古の宇宙の霊的な表現」であり、人間の最奥に存する「存在の根源的表現」でもあるからである。そうした気分を人間が感じることによって、人間は自己の本質を獲得できるということである。この考え方に立つと、「自己の存在の根源的表現」とは何か、そもそも「霊」とは何か、という問いに到達する。シュタイナーのこの概念を整理しておく必要がある。シュタイナーのメルヘン論を考察するにあたっては、こうしたシュタイナーの人間観・世界観を踏まえなければならぬのである。

3 シュタイナーの人間観・世界観

(1) シュタイナーの人間観

シュタイナーの人間観・世界観について整理することにする。シュタイナーは、人間を物質であ

ると捉えていない。人間を霊的な存在と捉えている。これは神智学思想であり、後にシュタイナーが設立した人智学協会の思想でもある。シュタイナーは、人間は「体」「魂（心性）」「霊（精神）」からできていると考えている。「体」は、粗雑なものであり、「魂」は微細なものである。さらに微細なものが「霊」である。「体」「魂」「霊」はどのように違うのか。シュタイナーは次のように説明する。¹⁵

体と霊との間に、自ら固有の生活を営む魂がたつて、愛好、嫌悪、願望、欲望のいとなみを成り立たせている。魂は、思考力を自分のために奉仕させる。魂は、感覚魂として、外界の印象を受け取り、そしてそこから得た成果を永続的に吸収するために、その印象を霊のところにもたらず。魂はいわば仲介者の役割を受け持ち、そしてこの役割を果たすことで、自己の使命を成就する。体は、魂のために印象を形成し、魂は、それを感覚内容に作り変え、記憶内容として保管し、霊にそれを提供し、そして霊がこれを永続的に保持し続けるのである。

ここに「体」「魂」「霊」の違いが説明されている。「体」は、印象を形成し、「魂」はそれを感覚し、記憶に保管する。「霊」はそれを使って、永続的に保持し、これが能力となる。このうち肉眼で確認できるものは、「体」の肉体だけである。それ以外のものは、感覚的世界を超えた世界に参入できたものだけしか確認することができない。シュタイナーは人間をさらに詳細に説明する。¹⁶「体」は「肉体」「エーテル体」「アストラル体」「自我体」に、魂は「感覚魂」「悟性魂」「意識魂」に、霊は「霊我」「生命霊」「霊人」に分かれる。「体」とは「存在に何らかの種類の「形姿」「形態」を与えるもの」である。肉体は「鉱物的構造」を伴う「形姿」である。エーテル体やアストラル体よりも粗雑なものである。この肉体の周りに雲のように表れる構成体がエーテル体、アストラル体である。これは肉体よりもより微細なものとなる。エーテル体は、すべての植物、動物の中に存在する生命に満ちた形象である。これは「生命体」ともいわれる。このエーテル体の側面にはアストラル的形姿が広がっている。これを「魂体」と呼ぶ。この「魂体」をこえて「感覚魂」「悟

性魂」が広がっている。「感覚魂」は、快・不快、衝動、本能、情欲等に結びついている感覚活動の源泉である。この「感覚魂」より高次元魂が「悟性魂」である。この「悟性魂」は思考能力を持っている。そのうち、真理と善にふれるものを「意識魂」として区別している。「魂体」と「感覚魂」は一つである。これを「アストラル体（感覚体）」と呼ぶ。「エーテル体」は力の形象であり、素材ではない。「アストラル体」は内的に運動する光輝く形象である。

一方、人間は自分を他の一切から区別された独立の存在、「私は私である」と意識する。これを「自我」という。「自我」は、意識魂から輝きでて、体に作用し、霊の中に生きている。霊の中に生きる私は「霊我」と呼ばれる。反感・共感から独立し、真理と私が結びついたものが「霊我」である。人間の霊的個性（オーラの外皮）は「霊人」と呼ばれる。霊的生命の力が働きかけるものを「生命霊」と呼ぶ。このように霊は「霊人」「生命霊」「霊我」に分かれる。シュタイナーは人間の構成を次のように捉えている。¹⁷

A 肉体、B エーテル体、生命体、C 魂体—— 体
D 感覚魂、E 悟性魂、F 意識魂————— 魂
G 霊我、H 生命霊、I 霊人————— 霊

このうち、C魂体とD感覚魂は一つである。F意識魂とG霊我也一つである。「自我」が発達しアストラル体を作りかえるとき、作りかえられたアストラル体は「霊我（東洋的な表現で言えばマナス）」と呼ばれる。学習はアストラル体の変化には役立つ。しかし、習慣、気質、性格、記憶力の変化は、自我によってエーテル体を変化させなければならない。修行によって変化したエーテル体は「生命霊」（東洋的表現ではブッディ）と呼ぶ。また、修行者は自我を高度に発達させ、自分の肉体をも変化させることができる。血液循環や心臓の鼓動も変化する。これは「霊人」（東洋的表現ではアートマン）と呼ばれる。

「エーテル体」で印象を知覚し、「アストラル体」で知覚を言葉に置き換え、思考し、記憶内容として保持する。また、「霊我（意識魂）」では「霊」から流れこむ真理と善は、霊我（意識魂）によって思考され、記憶として永続的に保持される。このようにして人間の意志は形成される。シュタイ

ナーはこうした人智学を基にした人間観を持っているのである。

(2) シュタイナーの世界観

シュタイナーの持つ人間観は、さらにシュタイナーの深遠で広大な世界観に発展していく。シュタイナーはわれわれが居住する地球は、進化を重ねてきたものであるとしている。¹⁸ 地球は、「土星紀」「太陽紀」「月紀」「地球紀」を経て現在に至っている。このなかで人体は土星紀において誕生し、太陽期においてエーテル体が肉体と結合し、月紀には肉体とエーテル体にアストラル体が入り込み、地球紀において、肉体、エーテル体、アストラル体に自我が結びついたとしている。前述したメルヘンの持つ「宇宙の古い霊的な神秘的表現」は、人間の創造的進化の歴史と関係があるというのである。シュタイナーは、人間は睡眠中に宇宙とつながった中間状態があると説明する。¹⁹

人間の魂は睡眠中肉体を離れると、全宇宙と直接関連した存在となり、全宇宙との結びつきを感じます。人間の自我と宇宙との結びつきを容易に思い起こさせる一つの可能性があります。

この中間状態で、人間は魂の奥深いところで、「宇宙の古い霊的な神秘的表現」のイメージを臆気ながらも直観するのである。そのイメージがメルヘンとして語り継がれているとシュタイナーは言う。例えば、メルヘンに「巨人」が頻繁に登場してくるのは、「宇宙の諸力の前では、人間はあまりにも無力である」というイメージを表現しているにすぎないと言う。このようにメルヘンは人間の創造的進化の一コマを表現するものなのである。

人間が「宇宙の古い霊的な神秘的表現」をイメージし直観できるのは、人間が宇宙空間という時空間の中で、「転生」を繰り返しているからである。シュタイナーは、人間には「転生」を繰り返して、より完全なものに近づこうとする意志、進化しようとする意志があると言う。シュタイナーは、進化とは「自我」がアストラルを作りかえることであると言う。²⁰ 自我によって作りかえられたアストラル体の一部は「霊我（マナス）」と呼ばれる。自我によって作りかえられたエーテル体は、「生命霊（ブッディ）」と呼ばれる。自我によって作りかえられた肉体は、「霊人（アートマン）」と呼

ばれる。こうして人間は霊的に成長、進化していく。しかし、現在の地球に生きる人間は、自我がアストラル体やエーテル体を支配できずにいる。自我がアストラル体やエーテル体をコントロールし、我欲を克服し、他者とともに幸福な社会を創り上げることが人間の生きる目的であるとしている。しかし、人間の内面では、進化の過程で、闇とも対峙していく。そこでは闇と光の壮絶な戦いが繰り返される。この戦いのイメージが語られているのがメルヘンなのである。

4 シュタイナーのメルヘン解釈

(1) メルヘン解釈

ユングは「元型」というイメージでメルヘンを解釈する。ユング派の河合隼雄はグリム童話の元型的解釈を試みている。「トルーデ」という昔話を「グレートマザー」の側面から、「二人兄弟」を「影」という側面から、「忠臣ヨハネス」を「トリックスター」の側面から、「なぞ」を「アニマ」の側面から、「つぐみの髭の王さま」を「アニムス」の側面から解釈している。²¹

一方、シュタイナー派のヨハネス・W・シュナイダー (Johannes W. Schnieder) は、人智学的側面からメルヘンの解釈を行っている。シュナイダーは、メルヘンの教育的意味について次のように述べている。²²

メルヘンのなかでは、善人が苦難に陥り、虐げられ、魔法で何か別のものに姿を変えられるとしても、最後にはすばらしいハッピーエンドを迎えます。多くのメルヘンは、悪い継母、魔女、魔法使いなど、悪者は滅ぼされる結末になっています。(中略) 子どもはさんざん悪いことをしてきた悪者が最後に厳しく懲らしめられる、あるいは自滅する、といったストーリーを体験します。子どもにとって、善が栄え、悪が減びるという首尾一貫性は、おとなにとっての思考の論理的な首尾一貫性と同じように、重要な意味を持っています。

この勸善懲悪の首尾一貫性がシュタイナーの言う「宇宙の古い霊的な神秘的表現」であると考えられる。そのうえで、シュナイダーは、メルヘンを三つの類型にまとめている。²³

第一の類型は、人間の意識がまだ天上界と結びついている状態を描いています。そこでは、人間はまだ神々と直接的なつながりを持ち、神々との結びつきから地上で生きるための力を汲み取ります。たとえば、天上的な努力によって病気が癒されます。無私の心で天上の力に頼れば、すべてがうまくゆくのです。

第二の類型では、人間の本質が天上界と地上界に分かれます。天上界と地上界はまだ結びついていて、人間は天上的な救いの力を受け取ることができるのですが、ともかく、メルヘンのなかに二つの異なる世界が現れます。

第三の類型では、人間の意識は天上界から離れ、地上界における未来に向かって進んでいきます。人間は地上における運命や苦難に巻き込まれ、それを克服しようとします。そして地上でのさまざまな体験を通して、ふたたび天上的な力、根源的な力を獲得するに至ります。

シュタイナーの類型は、メルヘンの様式をよく表現している。そして、人智学の観点から、超感覚的世界と人間のいる現実世界との結びつきも捉えられている。ユング派のメルヘン解釈は、メルヘンを「人間の内的な成熟過程のある段階」として描き、「元型」というキーワードで解釈していく。しかし、そこには超感覚的世界と現実世界との結びつきについては言及されていない。そこが人智学的側面からの解釈とユング派の元型的側面からの解釈の違いである。

(2) シュタイナーのメルヘン解釈

1) 超感覚的世界の本質

シュタイナーは、メルヘンは人間の意図的な創作ではなく、「宇宙の古い霊的な神秘の表現」であることは既に述べた。それではそうしたメルヘンをどのように解釈したらよいのだろうか。人類の古い霊的な神秘の本質をメルヘンのなかから、どのように取り出したらよいのが問題となる。シュタイナーは次のように述べる。²⁴

メルヘンの意味を解明するための手段を、人智学の叡智のなかからとり出してこようとする意志が、私たちのなかになければならないということです。

シュタイナーはメルヘンを人智学の観点から解

釈することを勧める。つまり、霊学の観点でメルヘンを解釈することが重要であるとしているのである。現実を描写した物語の奥に潜む霊的世界、これを超感覚的世界と言い換えてもよい。その超感覚的世界の本質をどう取り出すか、問題となってくるのである。シュタイナーは次のように述べている。²⁵

メルヘンの世界の根底にははっきりとした信仰が横たわっています。われわれの周囲にあるものはすべて魔法にかかった霊的現実であり、人間がこの霊界にかけられた魔法を再び解くとき、人間は真実に至る、という信仰です。

シュタイナーは、現実の目に見える世界にかけられた魔法を解き、超感覚的世界にある本質を明らかにすることがメルヘンの解釈だとしている。現実的な描写の影に隠された超感覚的世界の本質をどう導き出せるかが、メルヘンを読むときの鍵となってくるのである。そこで、シュタイナーが実際にメルヘンをどのように解釈していたかを次に考察することにする。題材としては、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)が書いた「緑の蛇と百合姫のメルヘン」²⁶を解釈することにする。

2) ゲーテの「緑の蛇と百合姫のメルヘン」

ゲーテはドイツの詩人、劇作家、小説家で、自然科学者、政治家、法律家でも活躍した。『若きウェイテルの悩み』『ファウスト』などの著作はよく知られている。シュタイナーは22歳の時、ゲーテの自然科学に関する著作を校訂した。その成果は、1897年に『ドイツ国民文学』という叢書の第一巻として出版されている。この中に「緑の蛇と百合姫のメルヘン」がある。この物語の内容は筆者がまとめると次のようになる。

鬼火が船を出して欲しいと渡し守(無意識の魂の力)に頼む。渡し守は船を出す。鬼火は船賃として金貨をあげる。しかし、渡し守はそれを受け取らず、岩の割れ目に落とす。たまたまそこにいた緑の蛇はそれを飲み込んでしまう。蛇はやがて金貨の持ち主の鬼火と出会う。鬼火は百合の姫のいる宮殿に行きたいと言う。百合姫には彼女の手が触れると相手が死んでしまうという恐ろしい呪いがかけられている。隣の国の若者(王子)はそんな百合姫に心を奪われている。若者(王子)は百合姫のところに行きたいと思う。しかし、二

つの国は川で隔てられており、橋がなく渡ることができない。緑の蛇の国（現実の感覚的世界）から百合姫の国（超感覚的世界）に行くには、真昼に蛇の背を伝わっていくか、夕方に巨人の長い影を利用していかしかない。そのとき、生命を与えるランプを持つ老人が現れる。老人はすべての者が力を合わせると奇跡が起きると言う。緑の蛇はそれを聞いて橋となる決心を密かにする。緑の蛇が橋となり、若者たち一行は百合姫の国に行くことができた。若者（王子）は百合姫に会い、百合姫に触れようとする。しかし、その途端、若者（王子）は死んでしまうのであった。老人はランプの力によって若者（王子）を運び出す。そこで、緑の蛇は自分の決心をランプの老人に伝える。緑の蛇は「犠牲にされる前に、自らを犠牲にすることです。」と言う。そして、老人は百合姫に「左手で蛇に触れ、右手であなたの愛する人に触れなさい。」と告げる。すると、若者（王子）の息は吹き返り、触れると相手を死に至らす百合姫の呪いも消えた。しかし、緑の蛇は何千もの輝く宝石となってしまった。老人はそれを集めて、川の中に宝石を投げ入れた。緑の蛇はやがて宝石の柱となって、百合姫の国（超感覚的世界）と緑の蛇の国（現実の感覚的世界）を結ぶ橋となったのであった。一行はその後、川の下に宮殿へと急ぐ。その後、宮殿は上昇し神殿も現れてきた。ランプの老人は「時が来たからです。三つの力が地上を支配している。叡智、光明、そして力だ。」と唱える。すると金、銀、銅の王が現れ、それぞれ若者に「認識（黄金）」「感情（銀）」「意志（銅）」を与えて祝福した。それはそれぞれ真・美・力の象徴でもあった。王子（若者）は百合姫を抱き寄せ、老人は「愛は育てるものだ」と祝福する。ランプの老人はこうした愛の奇跡が起こった基は、緑の蛇の自己犠牲によることが大きいと告げた。緑の蛇は二つの国に橋を架け、百合姫の呪いを解き、王子（若者）に力を与え、百合姫の国（超感覚的世界）と緑の蛇の国（現実の感覚世界）を一つにした。こうして物語は、3人の王に祝福された王子（若者）と百合姫が結婚し、二つの国が一つになり、人々に幸福をもたらす場面で終わる。

3) シュタイナーの「緑の蛇と百合姫のメルヘン」の解釈

シュタイナーは、「緑の蛇と百合姫のメルヘン」にみられるゲーテの精神様式」という論文を書い

ている。²⁷ この論文の中でシュタイナーは、ゲーテの「緑の蛇と百合姫のメルヘン」の解釈を試みている。シュタイナーは次のように述べている。²⁸

この詩作におけるメルヘン像の中でゲーテは、精神の目で捉えた人間の魂の発達を描いている。初め人間の魂は超感覚的なものに対して、違和感を感じている。しかし、最後の意識の高みにおいては、感覚世界でいとなまれた生が、超感覚的な精神世界によって浸透され、両者が一つになるのである。この変容のプロセスが、ゲーテの魂の前に、ファンタジーの形姿として軽やかに織られていったのである。

シュタイナーは、ゲーテはこの作品を通して、人間の魂の進化のありようを描いている。それはユングの「人間の成熟過程の一面を描く」のとは少し異なっている。シュタイナーは人間の魂が進化し、現実世界（緑の蛇の国）から超感覚的世界（百合姫の国）に入っていくという魂の進化の過程を描いていると主張する。この作品で出てくる川は現実世界と超感覚的世界を隔てる川である。渡し守（無意識の魂の力）は、超感覚的世界から現実世界へと人を運べるが、その反対はできない。これは人間が現実世界で生きていくといつしか超感覚的世界のことがわからなくなってしまうのと同じである。しかし、緑の蛇が現実世界と超感覚的世界を結ぶ架け橋となったのである。緑の蛇はこの架け橋になることを決断するまでにはかなりの時間を要した。ランプを持つ老人も蛇が自由意志で決断するのを待っていたのである。ゆえに蛇の決断を聞いた時、「時が来た」と叫んだのである。緑の蛇は自らをすすんで犠牲にして、現実世界と超感覚的世界を結ぶ架け橋となったのである。シュタイナーは次のように言う。²⁹

人は自分が存在するために、自分の存在を放棄しなければならない、というものである。緑の蛇という無私の人生経験は、叡智への愛の中で、また真の体験を伴う叡智の中で発達し、やがて自らの存在をなげうつ。そして、感性と精神性の間に橋が架けられるのである。

緑の蛇は現実世界を生きる中で、自らを犠牲と

して投げ打つ決断に至るまでに、彼の魂は成熟していたのである。ゲーテはこの過程を描こうとしたとシュタイナーは言う。緑の蛇は自己の自由意思でこの決断をした。この自由意思による決断が人間を精神的に開放し、人間を自由にするのである。まさしく現実の感覚的世界と超感覚的世界が一つになり、緑の蛇の魂は境域を超えて進化したのである。

超感覚的世界に参入するためには準備が必要である。若者（王子）はこの超感覚的世界への準備をしないで、百合姫（超感覚的世界）に触れて命を落とす。シュタイナーは言う。³⁰

超感覚的なものに触れようとするものは、人生経験を通じて自分の内面に働きかけ、超感覚的なものへ向けて備えておかなければならない。

緑の蛇の自己犠牲は、この王子（若者、現実の感覚世界）と百合姫（超感覚的世界）を一つにし、人々に幸福をもたらした。新たに王となった王子（若者）は青銅の王から「意志」を、銀の王から「感情」を、黄金の王から「認識」を授かった。これらの諸力を自分の魂の中で統合することによって、人間は「自由なる人格」は得られるとシュタイナーは言う。魂の進化とは、この「自由なる人格」を目指して、超感覚的認識を育て、やがて超感覚的世界と一つになることにあるとシュタイナーは解釈している。

おわりに—シュタイナーの人間観・世界観と道徳教育—

シュタイナーの道徳教育論は「感謝、愛情、義務の徳」「道徳的想像力」「倫理個性主義」に代表される。シュタイナー学校の実践場面では、詩の朗読、語り聞かせ、劇の上演、寓話と聖人伝説、聖書、オイリュトミーなどが道徳性を育むものとして実践されている。この中で「語り聞かせ」はシュタイナー教育の特徴で、シュタイナー幼稚園の頃から行われている。主にグリム童話（メルヘン）を扱い、教師は淡々と語り聞かせを行う。絵本の読み聞かせは絵本制作者の意図が直接子どもの内面に伝わるので、道徳的想像力を重視するシュタイナー学校では、語り聞かせが採用されている。メルヘンの解釈に関しては、ユング派の「普遍的無意識の元型が投影」されているという考え

方とシュタイナー派の「宇宙の古い霊的な神秘的表現」が投影されているという考え方があった。

シュタイナーはもともと人智学協会を主宰する宗教家であり、人間を物質ではなく霊的な存在と捉えている。人間は「体」「魂（心性）」「霊（精神）」で構成されており、自己の魂（心性）が進化・発展していくことが人間の生きる目的であるとしている。人間は現実社会で試練を受け、魂が浄化され、進化・発展していき、より高みの意識に到達していくという。これは自己の意識が超感覚的世界に参入していくことである。シュタイナーは、メルヘンにはこの現実社会から超感覚的世界へと魂が進化・発展していく過程がよく表現されていると言う。これはゲーテが書いた「緑の蛇と百合姫のメルヘン」の中でも確認できた。緑の蛇が自己犠牲を決心する魂の成熟過程がこのメルヘンのテーマである。子どもは超感覚的世界の響きに意識が向かう。このことによって子どもは自己の忘れていた故郷を思い出すのである。子どもはメルヘンから魂の栄養分を吸収しているとシュタイナーは言う。ここにシュタイナーのメルヘンに関するホリスティックな解釈が表れていると考える。

シュタイナーの人智学思想が学問的にどのような位置づけになるかは、現在も問題となるところである。しかし、現在の二元論的な世界観が人間に何ををもたらしたかについては、プラスの意見もマイナスの意見もあることは事実である。我々は来るべき未来に向けて、今何をなすべきか真剣に考えるときである。この論考ではこの議論については言及しない。しかし、シュタイナーのメルヘンの解釈において、彼の人智学思想が反映されていたことだけは確認できたと言える。

註

¹ 菊池誠子「シュタイナー幼稚園における「メルヘンの語り聞かせ」についての一考察」『盛岡大学短期大学部紀要12』2002年、pp.119-126.に詳しい。

² 下田好行「R.シュタイナーの道徳教育の特質—「道徳的想像力」とメルヘンとの関係を中心に—」『東洋大学文学部紀要第69集』教育学科編XLI、2016年、pp.71-79.

³ 国際ヴァルドルフ学校連盟「自由への教育[日本語版]ルドルフ・シュタイナーの教育思想とシュタイナー幼稚園、学校の実践の記録と報告」高橋巖・高橋ひろ子訳、フレーベル館、1992年、pp.125-128.

⁴ 前掲書、pp.133-137.

⁵ 学校法人シュタイナー学園『シュタイナー学園のエポック授

- 業—12年間の学びの成り立ち—』せせらぎ出版、2012年、pp.39-100.
- ⁶ 前掲書、p.64
- ⁷ 前掲書、p.98
- ⁸ 河合隼雄『昔話の深層—ユング心理学とグリム童話』講談社文庫、1994年、p.29
- ⁹ 前掲書、pp.32-34.
- ¹⁰ 前掲書、p.38
- ¹¹ ルドルフ・シュタイナー『メルヘン論』高橋弘子訳、水声社、1990年、に掲載されている。
- ¹² 前掲書、p.135
- ¹³ 前掲書、p.82
- ¹⁴ 前掲書、p.47
- ¹⁵ ルドルフ・シュタイナー『神智学』高橋巖訳、ちくま学芸文庫、2000年、p.93
- ¹⁶ 前掲書、pp.42-170.に詳しい
- ¹⁷ 前掲書、pp.42-170.に詳しい。
- ¹⁸ ルドルフ・シュタイナー『シュタイナー・ヨハネの福音書講義』1997年、pp.25-26.
- ¹⁹ ルドルフ・シュタイナー『メルヘン論』高橋弘子訳、水声社、1990年、p.34
- ²⁰ ルドルフ・シュタイナー、1997年、pp.31-34.
- ²¹ 河合隼雄、1994年、に詳しい。
- ²² ヨハネス・W・シュナイダー『メルヘンの世界観』高橋明男訳、水声社、1993年、p.16
- ²³ 前掲書、p.18
- ²⁴ ルドルフ・シュタイナー『メルヘン論』高橋弘子訳、水声社、1990年、p.52
- ²⁵ 前掲書、p.82
- ²⁶ 前掲書、pp.167-211.を筆者は読んだ。絵本としては、『ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテDas Märchenメルヘン』ヴェルナー・ディートリッヒ画 乾侑美子訳 あすなろ書房1997がある。
- ²⁷ ルドルフ・シュタイナー「『緑の蛇と百合姫のメルヘン』にみられるゲーテの精神様式」『メルヘン論』高橋弘子訳、水声社、1990年、pp.141-166.
- ²⁸ 前掲書、pp.164-165.
- ²⁹ 前掲書、p.157
- ³⁰ 前掲書、p.158
- *この研究は平成28年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ホリスティックな視点に立つ道徳教育研究」の助成を受けて行ったものである。